平成２６年度オホーツク総合振興局管内ケガニ漁場一斉調査結果

（地独）北海道立総合研究機構水産研究本部
網走水産試験場

この調査は，漁期前半のケガニかご漁業の状況をモニタリングする目的で行われています。昭和60年から毎年1回，下記機関と共同で継続実施しています。

網走支庁管内毛がに漁業対策協議会および各漁協けがにかご部会
北海道オホーツク総合振興局産業振興部水産課

宗谷総合振興局管内についても同様の調査を実施しており，その調査結果は稚内水試が取りまとめています。なお，資源量や漁獲許容量については，漁期後半の「資源密度調査」から推定されます。

調査結果の要約

- 甲長8cm以上雄の100かご当たり漁獲尾数は293尾で昨年（367尾）の0.8倍であり，過去のオホーツク総合振興局管内の平均値（310尾）と同程度でした。
- 甲長8cm未満雄の100かご当たり漁獲尾数は138尾で昨年（133尾）と同程度であり，過去の平均値（137尾）並でした。
- 甲長8cm以上雄に占める堅ガニの割合は管内平均では66%で，昨年（37%）より29ポイント増加しました。
- 全ての雄のうち甲長8cm未満の雄が占める割合は32%で，昨年（27%）より5ポイント増加しました。

調査方法

平成26年度の調査は沙留，紋別，常呂，網走，斜里第一の各漁協に所属するけがにかご漁業許可船8隻が参加し，4月14日から24日までに実施しました。

各船は通常の漁場で操業し，漁獲されたケガニを選別せずにコンテナ1杯（約40kg）になるまで採集しました。このときコンテナが1杯になるまでのカニかごの数を記録してもらいました。また，採集した標本を無選別のまま全て（雌や8cm以下の雄を含めて）港に水揚げし，甲長や体重などを測定しました。

調査結果

表1に各船の調査日，調査点の緯度経度，水深，ＣＰＵＥ（1隻100かご当たりの漁獲尾数）を示しました。

表 1　2014(平成26)年 オホーツク総合振興局管内ケガニ一斉調査標本採集データ一覧

海域	漁協	調査日	船名	北緯	東経	水深（m）	ＣＰＵＥ（100かご当たり漁獲尾数） 甲長8cm以上オス 堅	若	計	8cm未満オス	メス
網走西部	沙留	4月15日	第百二十八長隆丸	44－37.0	143－23.9	91	305	52	357	224	19
	〃	〃	第八十八永宝丸	44－38.7	143－18.7	93	427	80	507	247	60
	紋別	4月16日	第十八平栄丸	44－28.5	143－34.9	102	300	57	357	124	5
	〃	〃	第七　北幸丸	44－26.4	143－34.0	82	178	70	248	104	7
	海域１隻平均						302	65	367	174	23
網走中部	常呂	4月17日	第88　海宝丸	44－18.8	143－54.3	127	36	21	57	24	4
	〃	〃	鳳希丸	44－16.3	143－55.3	92	58	25	83	131	8
	海域１隻平均						47	23	70	78	6
網走東部	網走	4月21日	第八　能代丸	44－2.7	144－27.1	68	114	436	550	93	43
	斜里	4月22日	第三十八金鏡丸	43－59.9	144－39.5	62	136	52	188	156	24
	海域１隻平均						125	244	369	124	33
	管内１隻平均						194	99	293	138	21

・ＣＰＵＥ（100かご当たり漁獲尾数）

図1に漁獲対象である甲長8cm以上雄ガニのＣＰＵＥとそれに占める堅ガニの割合の年変化を，図2には8cm未満の雄ガニ（規格外）のＣＰＵＥを海域別とオホーツク総合振興局管内全体で示しました。

注）：この調査は通常操業用の3寸8分目のかにかごによる調査であるため，密度調査と異なり，採集される雄ガニのほとんどは甲長7cm以上の個体となっています。

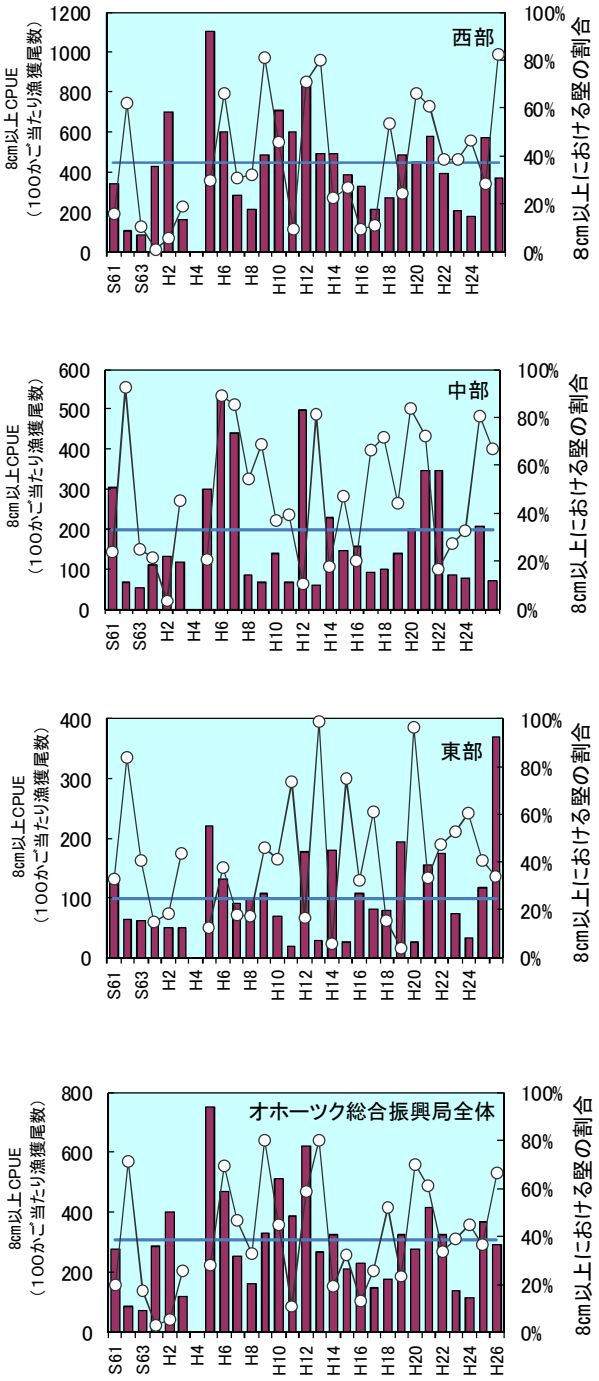

図１　甲長８cm以上雄の100かご当たり漁獲尾数（CPUE；縦棒）と堅ガニの割合（白丸折れ線）の推移　（青線はCPUE平年値）

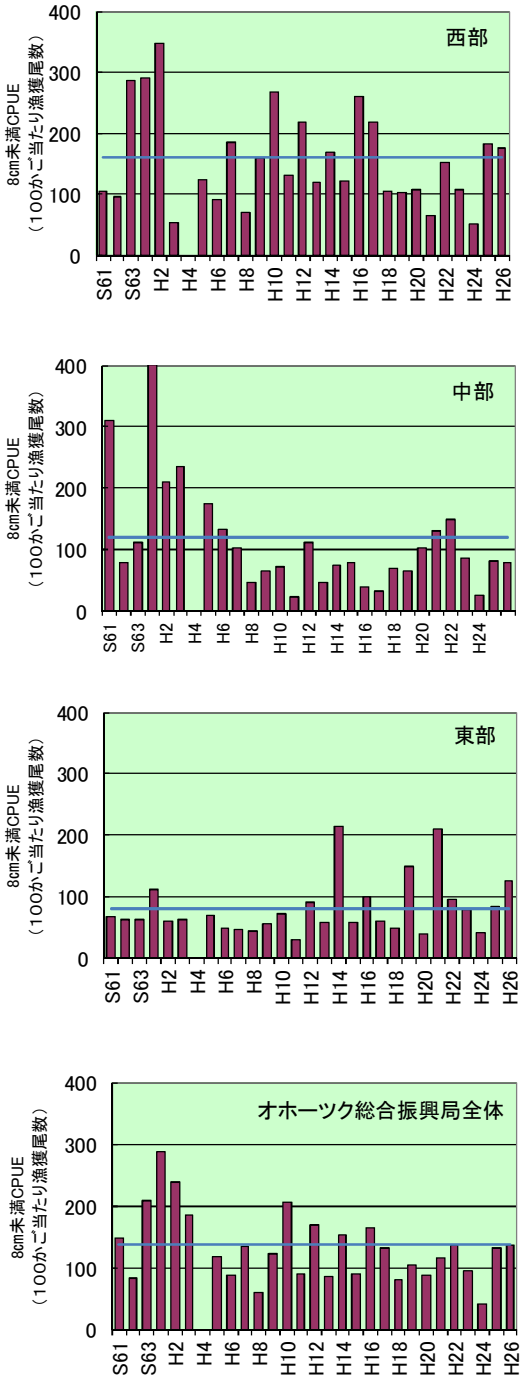

図２　甲長８cm未満雄（規格外）の100かご当たり漁獲尾数の推移（青線は平均年値）

①甲長8cm以上の雄ガニのＣＰＵＥ：

管内の平均ＣＰＵＥ（1隻100かご当たりの漁獲尾数）は293尾で，平成25年度（367尾）の0.8倍で，昨年より減少しました（図1）。また，平年値（昭和61年から平成20年までの平均値310尾）と比較すると，平年値より若干少ないもののほぼ同程度でした。

海域別にみると，西部海域のＣＰＵＥは367尾で昨年度（572尾）の0.6倍，中部海域は70尾で昨年度（206尾）の0.3倍，東部海域は369尾で昨年度（117尾）の3.1倍となり，東部海域以外では大きく減少しました。平年値と比較すると，西部海域（平年値446尾）は0.8倍，中部海域（同196尾）は0.4倍，東部海域（同99尾）は3.7倍程度で，中部海域で大きく減少し，逆に東部海域では大きく増加しました。

②甲長8cm未満雄ガニ（大部分が7cm台）のＣＰＵＥ：

管内の平均ＣＰＵＥは138尾で，ほぼ昨年度並み（133尾）でした（図2）。また，平年値（137尾）と比較すると平年値と同程度でした。

海域別にみると，西部海域のＣＰＵＥが174尾で昨年度（183尾）とほぼ同程度，中部海域も78尾で昨年度（81尾）と同程度でしたが，東部海域は124尾で昨年度（83尾）の1.5倍に増加しました。平年値と比較すると，西部海域（平年値160尾）は1.1倍，中部海域（同119尾）は0.7倍，東部海域（同79尾）は1.6倍程度で，中部海域でやや減少し，逆に東部海域では増加しました。

・甲長8cm以上雄の堅ガニの割合と漁獲動向

採集された甲長8cm以上雄ガニのうち，堅ガニの割合は管内平均では66%で，昨年度の37%より29ポイント増加しました（図1）。海域別に見ると，西部海域は82%で昨年度の29%より53ポイント増加しました。中部海域は67%で昨年度の80%より13ポイント減少，東部海域は34%で昨年度の41%より7ポイント減少しました。

甲長8cm以上の堅ガニのＣＰＵＥは管内平均１隻当たり194尾（表1）で，昨年度（135尾）の1.4倍に増加しました。海域別には，西部海域が302尾と昨年度（163尾）の1.9倍に増加，中部海域が47尾と昨年度（166尾）の0.3倍に減少，東部海域が125尾で昨年度（48尾）の2.6倍に増加しました。

・各銘柄（サイズ）の漁獲割合

全漁獲物の雄ガニのうち，銘柄「小」（甲長8cm台）の割合は，管内全域としては昨年度（62%）より9ポイント低い53%，「中」は昨年度（12%）より2ポイント高い14%，「大」は昨年度（1%以下）より2ポイント高い2%でした（図3）。また，規格外雄の総数に占める割合は，管内全域としては昨年度より5ポイント高い32%でした。

甲長8cm以上雄ガニのうち，海域別に見た銘柄「小」が占める割合は，西部海域が昨年度（84%）より13ポイント減少して71%，中部海域が昨年度（80%）より7ポイント減少して73%，東部海域が昨年度（84%）より7ポイント増加して91%となりました（図4）。

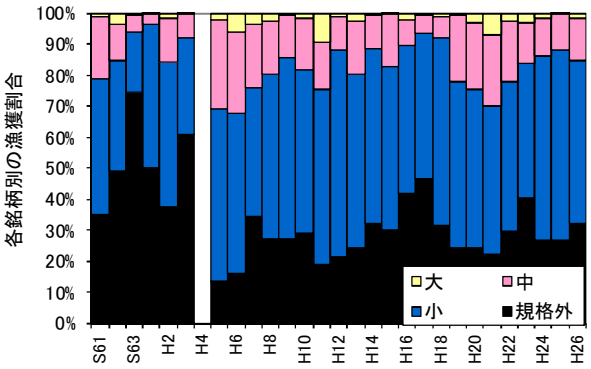

図３　オホーツク総合振興局管内全体における銘柄別漁獲割合（%）の推移

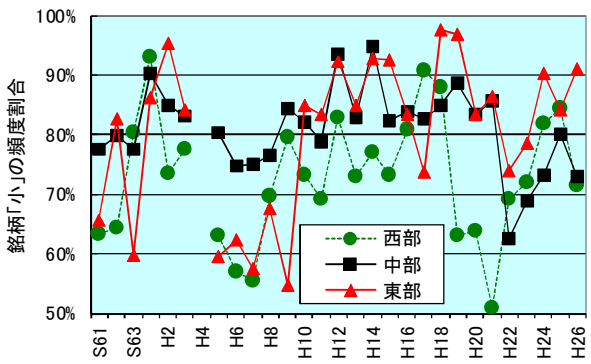

図４　甲長8cm以上（規格内）の総数において小（８cm台）が占める割合の推移

調査結果と漁業の状況

本年度調査結果からみると，甲長8cm以上の雄ガニのＣＰＵＥは，昨年度よりやや減少していますが平年値と同程度であり，平成23，24年度よりはかなり高くなっていました。また，堅ガニの割合やＣＰＵＥは，昨年度より増加していました。甲長8cm以上雄ガニのうち銘柄「小」の割合は，平成23年度からは各海域ともほぼ70％以上となっており，平成26年度も各海域で70％以上と高い比率となっていました。これらのことから，本年度の休漁期までの漁期前半では，銘柄「小」の堅ガニが主体となる漁獲が続くと思われます。

平成25年度は流氷が比較的遅く3月上旬まで居座りましたが，平成26度もまた流氷の影響で，4月末の時点でも思ったように操業日数が稼げない漁協が多く，また未だ出漁できていない漁協もありました。オホーツク総合振興局管内では，宗谷総合振興局管内に比べて漁期初めの環境要因（流氷・水温等）が毎年不安定であり，本調査結果だけから漁獲動向や資源動向を評価する事は難しいのですが，昨年度の密度調査結果も合わせて考えると，本年度の資源状態はほぼ予想通りに回復基調で推移していることが伺えました。今後は，操業時の漁獲動向やまかご一杯調査の結果も注視しつつ，6月中旬以降に密度調査を行い次年度の資源評価を行う事になりますので，今後ともご協力よろしくお願いいたします。